

著作賞

岡本健著『アニメ聖地巡礼の観光社会学
ーコンテンツツーリズムのメディアコミュニケーション分析』
(法律文化社 2018年9月)

<講評>

本書は、情報社会における観光の可能性を、観光社会学の見地から検討した著作である。本書では冒頭に研究目的が示される。それは「情報社会において観光は他者性を持った他者との交流の回路になりうるのか、なるのだとすればそれはどのような仕組みになっているのか」ということを明らかにすることである。その目的のために、本書は以下のような手順で著述を進める。

まず、今日の情報社会がもたらす再帰的近代化による個人化から、今日の社会では「他者性を持った他者と出会う機会」が求められていることを指摘した。そして「観光とメディア」「旅行者の特徴」「旅行者と地域住民の相互作用」の3領域(11項目)について内外の先行研究を行い、今日起こっている「ホストとゲストの二項対立を超えた、情報空間と現実空間の双方で行われる旅行に関するコミュニケーション」を実証的に検討することが必要との課題を導き出した。その事例として、アニメ聖地巡礼を採り上げ分析することにした。新聞雑誌記事の検索調査や大河ドラマとの比較を行った結果、アニメ聖地巡礼者には「能動的な受信、活発な編集・発信活動」という特徴が見られたが、さらに埼玉県久喜市鷲宮と滋賀県犬上郡豊郷町の現地調査を行った結果、一見「動物的」であるとみられたアニメ聖地巡礼者には「(地域住民や他の旅行者など)他者性を持った他者とのコミュニケーションを行った」「アニメとは関係のない場所に興味を持ったり」という現象が見られることが分かった。さらに彼らのこのような行動は、地域からの情報発信や地域とは関わりのない他者のCGMの情報発信等の集積が回路となり、それを支えていることも分かった。またアニメ聖地巡礼者に対し質問紙によりその行動を分析する調査も行ったが、最も能動的である「開拓的アニメ聖地巡礼者」においても、「動物的」であると共に、地域に深く入り込むなど「動物化から脱却している」場合も見られた。これらのことから、本書は「観光は他者性を持った他者との交流の回路になりうる」と結論付けた。

本書の最大の特徴は、情報社会における観光の可能性を真正面から検討しようとしたテーマ設定の大きさにある。近年観光並びにコンテンツツーリズムの研究は増加しているが、どちらかと言えば事例研究的な研究や、地域政策や観光ビジネスなど分野を限定した研究が目立つ。この点において本書の研究目的のスケールは稀有であり、観光並びにコンテンツツーリズム研究が果たしうる学問的、社会的意義を高めるものである。本書のように大きなテーマに立ち向かうためには広範な先行研究や複数の視点からの調査が必要となるが、本書では、前述のように、先行研究において3領域(11項目)にわたって広範な先行研究が行われており、また調査においても、新聞雑誌の検索、大河ドラマとの比較、「開拓的アニメ聖地巡礼者」の調査、4聖地における質問紙調査、2聖地に対する現地調査という、方法・

視点の異なる5つの調査結果が反映されている。その結果、大きなテーマを複数の視点から論証することに成功している。

さらに前述のように、本書において指摘された、地域からの情報発信や地域とは関わりのない他者のCGM 的信息発信等の集積が情報の回路となり旅行者の行動を支えているとの指摘は、これまでの観光研究では意識されなかった構図の発見であり、重要な知見が獲得できたものと評価できる。

難点を言えば、著作全体を通して調査対象としたアニメ聖地が巡礼現象の発生から10年前後を経過した聖地であり、最新の巡礼現象が反映されているとは言えないことが挙げられるが、本書で採り上げられた聖地は全て現在においても程度の差はあれ巡礼現象が続いていることを考えると、これらの事例を以って結論を導くことに不都合はないと思われる。

よって本書は、観光学術学会の「著作賞」に該当する作品であると判断する。